
Top Secret

S&N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Top Secret

【Nコード】

N8241E

【作者名】

S&N

【あらすじ】

「運命とはきまぐれなものである」平凡な生活を送っていた沙羅は、私立白百合学園に転校することになった。この学園は、大富豪の子供が通う超エリート学園。慣れない寮生活に戸惑う中、友達にある部活を勧められる。表は地味な「社会研究部」、しかし裏はこの学園の重要秘密事項―Top Secret―の集まりだった・・・。

Secret 1

運命とは気まぐれなものである。

普通の生活をしていたのが、明日になると180度変わっているかもしれないのだ。

当然、平凡な一般人の私が、超お金持ち学校に転校することだってありえるのだ・・・。

＊ ＊ ＊

今日から私は、この高校で一年間過ごすことになる。

超名門校・私立百合学園。

日本でも有数の、超エリート学園だ。この学園は小中高一環で、全寮制になっている。家に資料が届いていたから、なんとなくすごい学校なんだなあとは思っていた。

・・・でも。

「何、このばかでかい校舎は！」

想像していた以上に大きい。大きすぎる。

校門らしき所にはものすごく大きな鉄の柵があって、学園の周りには上等な煉瓦でぐると囲まれており、顔を上げると柵の少し向こうにこれまたばかでかい建物がそびえ立っている。そのてっぺんには、チャイムを鳴らすのだろう、大きな鐘があった。

「そんなに驚くことですか？沙羅さん。」

私の隣に立っている男性は、不思議そうに私を見ていた。

私は決して身長が低い方ではないけど、この男性に完璧、見下ろされている。190センチ位の身長で、整った顔立ち、短く切られた髪は、ところどころ白髪が混じっていた。典型的な紳士だ、きつと

この男性は、超エリート学園——私立百合学園——の理事長であり、私のお父さんの古い友人でもある。

「私みたいな平凡で普通の女子高生はみんな驚きますよ!」

「でも、ここに転入するからには平凡な高校生活は送れなくなりますよ。」

理事長が苦笑いをする。

「平凡な高校生活かぁ・・・。」

そう、一カ月前までは、普通の高校生活を送っていたんだ。地元の高校に入学し、新しいクラス、新しい友達、新しい環境の中で過ごしていた。普通に恋愛だっと思っていたと思っていた。けれど入学してたった五日で、無残にも私の憧れは砕け散った。

学校から帰宅後、家にいるはずのお父さんの姿がなかった。お母さんは、私が五歳の時に家を出て行ってしまった。ずっと昔のことだから、記憶は曖昧だけど、お父さんとお母さんの仲が悪かったわけではないと思う。いや、むしろ仲が良すぎたくらいだ。それなのに、何故お母さんがいなくなったのか、あの頃の私は不思議でたまらな

かった。

『おかあさん。まって！どこいくの！』

玄関から出て行こうとするお母さんを泣きながら必死で止めようとした私。

お父さんは、私の横で悲しそうにお母さんを見つめていた。

『また、いつか会える日が訪れるのを願っています。』

そう言って、お母さんは静かに出て行った。

『まって！おかあさん』

私は追いかけてようとしたけど、お父さんに抱き上げられた。

『おとうさん！おかあさんがどこかいっちゃったよ！』

泣きながら言う私に、お父さんは優しく私の頭をなでた。

『大丈夫。時が来ればまた三人で暮らせるよ。』

お父さんは、目に涙を浮かべてつぶやいた。

その日から、私とお父さんの二人暮らしが始まった。
お父さんは考古学者だった。外国に行くこともある。そのため、家にいないことが多く、私が自分で夕ご飯を作って一人で食べることもしばしばあった。

お母さんが出て行ってから十年がたったけど、今までお母さんから連絡が来たことは一度もなかった。今となっては、お母さんの顔もどんな顔だったのかはつきりしない。何度か、お母さんがなぜ出て行ってしまったのかお父さんに尋ねたことがあった。しかしそのたびにお父さんの表情は暗くなり、今は何も言えないと言い、その場から逃げて行ってしまう。私も、もうお父さんに尋ねるのをやめることにした。お父さんの悲しそうな顔は見たくなかった。

お父さんと私の二人暮らしは決して裕福とは言えなかったけど、普通の暮らしはできていた。お父さんとも仲良くやっていたし、お母さんがいない生活は苦にならなかった。

そんなお父さんが、姿を消した。家中探し回ってもどこにも居ず、外に散歩にでも行っているのだらうとおもったけど、リビングの机の上に手紙が置いてあるのを見つけ、手に取った。それは、私に別れを告げる内容だった。

「――沙羅へ

お父さんの勝手な判断でいなくなってすまない。しかし、お前と離れなければならぬ程の大変な事が起きたんだ。昔からお前は、お母さんがなぜいなくなってしまったのか、疑問に思っていただろう。実はお母さんは、ある事情があつてここにいられなくなってしまったんだ。その事については時がくれば分かるだろう。おまえは今度から別の学校に転校してもらおうと思う。これも勝手に決めて本当にすまないと思つてゐる。理事長は私の昔からの友人だから、何かと世話をしてくれるだろう。次、沙羅の所に帰つて来る時は、お母さんと三人で暮らそうな。じゃあ、しばらくお別れだ。

父より」

私はこの手紙を読んだ後、大泣きしてしまった。

「なんでお父さんもお母さんも勝手にいなくなるの！」

しかも、手紙の中にはなくなった理由も、二人はどこにいったのかも、私が知リたかった事は何一つ書かれていないのだ。いつ会えるかも分からないのに、全然知らない所で、友達が一人もない学校で帰って来るのを待ってっていうの。

ちよっぴり白暴自棄になって、ふともう一度机を見ると、大きな封筒が置いてあった。

「私立、白百合学園・・・？」

と書かれている。きつと学園の案内だろう。字の隣に、真っ白な百合をモチーフにした校章が付いていた。私は中に入っていた紙を取り出した。小中高一環の全寮制と書いてある。めずらしいなあと思っっていたら、ある事に気が付いた。そういうえば、白百合学園で・・・

「超～～～お金持ち学園じゃなかったっけ!？」

友達から聞いた事がある。確か、共学で、頭は恐ろしく良くて、社長や財閥の子供がそろそろ日本でも有数のエリート中のエリート学校だと。

そんなまさか、と思わずにはいらなかった。私は一般庶民なのだ。頭が良いわけではないし、特別すごい事ができるわけでもない。

「意味わかんないよ、お父さん!!」

私は天井に向かって叫んだのだった……。

「どうしました？」

と、理事長に声をかけられて、我に返った。

「いいえ、何でもないです！」

まあ過ぎてしまった事はもう仕方がない。昔よりも、今の方が大事なのだから。

気が付くと、正面玄関に立っていた。

理事長は、玄関の扉をゆっくりと開けた。

「!! 何じゃこりゃあ!!」

扉の向こうに広がっている光景に思わず大声を出してしまった。本当にここ、学校なの!?

「もちろん学校ですよ。」

「私、声に出してました？」

「はい。バリバリ出てましたよ。(笑)」

理事長はにっこり笑って言った。

それにしてもすごい。目の前に広がる光景に咄然としてしまう。見た目は中世のヨーロッパのお城の中みたい。絶対高そうな絵画や売れば百万は軽く越すだろう大きな銅像が至るところに飾ってある。

長い廊下を理事長に案内されながら歩いていく。
心地よい風が大きな窓から入り、私の髪を揺らす。

なんだか、眠くなってきた……。まだ朝早いせいか、生徒は見当たらない。いつのまにか理事長室に来ていた私は、理事長に促され、ふかふかの高そうなソファに座った。理事長は机を挟んで向かいのソファに座る。

「眠いですか？沙羅さん。」

「あっ……大丈夫です。」

あくびをしている所を見られてしまった。は、恥ずかしい……！

「無理をしないでくださいね。よく眠れていないのでしょうか？」

「……。」

確かに、お父さんが出て行ったあの日からあまり寝ていない。というか、寝れない。

「……。あのおー、理事長は父がどこに言ったのか知っていますか？」

ずっと聞きたかったこと・・・お父さんの失踪の謎。お父さんの昔からの友人である理事長なら何か知っているかも・・・。

「・・・すみません。私からは何も言えません。」

「そうですか・・・。」

時が来れば分かるのだろうか・・・。はたしてその時はいつだろうか・・・。

長い沈黙の後、理事長が思い出したように声をあげた。

「そういえば、まだ沙羅さん、制服をわたしていなかったですね。」

「へっ・・・あつ、はい。」

突然のことでビックリした。確かに、前通ってた高校（たったの五日だけど・・・）の黒いセーラー服を着ている。

「ここ白百合学園の制服は、白と黒のブレザーから選ぶことができますが、どうします？」

「貴方には白の方が似合うと思います。」

「!!!」

第三者の声がして後ろを振り向いた。そこには、茶髪の髪をくるくるに巻いた美少女がたっていた。

誰、この子???

「お父様もそう思いますでしょ？」

「学校ではお父様はやめなさい。理事長です。」

理事長が険しい顔で美少女に言った。

・・・てゆうか、今「お父様」って言ったあ！？全く話が読めないんですが・・・！

□ ■ T o b e c o n t i n u e d . . . ■ □

Secret 2

理事長室からでて数時間がたった。

私はというと、クラスの成金息子や、お嬢様達に囲まれていた。

「どこから転校してきたの？」

「庶民って毎日の夕食が煮干ししかないって本当？」

「私はご飯と梅干しか食べないって聞いたわ。」

「可哀想だわ。ステーキやキャビアを食べたことないのね。そうですの？沙羅さん。」

「いやあゝ。あの・・・。」

ステーキは、食べたことがありますっ。まあ、キャビアはないけど・・・。しかも、ご飯と梅干だけっていつの時代だよ。教室の中は凄く騒がしかった。

「庶民が転校してきたんだってさあ。」

「まじかよっ。」

そんな会話がそこら中に響いていた。

「はぁ・・・。」

さっきから私に質問責めのクラスのお嬢様たちに少々困り果ててい

た。

「貴方達、沙羅さんが困ってるでしょ。もう、質問は止めなさい。」

私の周りを囲んでいた人はいなくなり、目の前に美少女が現れた。

「ありがとう。花憐ちゃん。」

「みんな悪気があって言ってるんじゃないから気にしないでね。」

目の前の美少女――西園寺花憐――は笑って言った。

花憐ちゃんは、ここに来て初めて出会った生徒で理事長の娘である。確かに、理事長には似てるけどね・・・。

「やっぱり、白で正解だわ。」

「あゝ。う、うん。」

花憐ちゃんに勧められて白いブレザーを着ただけど・・・。

「個人的には黒がよかったなあ。」

小さく呟いたつもりが花憐ちゃんに聞こえていたみたいで・・・

「だって、あなた見た目が地味だから黒なんて着たらもっと地味になるでしょ。」

「はああああゝ!!」

確かに私は地味だと思うけど一般的に見れば普通だよ。ここでは、一般的には見なさうだけど……。ていうか、一般的がわからなそう……。う……。

「クククツ……。冗談よ。庶民ってリアクションが面白いのね。本当はあなたには、なんとなく白くなって思いましたの。」

「何となくって……。」

なんかそれも悲しいかも……。

「そういえば、貴方これからどうしますの？ 私は部活に行くけど、寮に帰る？ あっ、でも寮の部屋がわからないかしら。」

「えっ、午後からの授業は？」

「授業は毎日午前だよ。休みの日も勝手に決めていいし授業は別に出なくてもいいの。」

「えええっく！！本当にここ、学校！？ 授業が午前だけなんて……。」

まさに、パラダイス！！！！！！

「この学園は部活中心だから、授業より部活なのよ。」

「……。変わってるね。」

授業より部活なんて……。確かにそういう学校もあると思うけど、変な学校だな……。。

「そうだっ！！！！沙羅さんも私の部活に入らない？」

えええっ！！！！部活かぁ……。中学の時は掛け持ちで、空手や弓道・陸上・剣道・料理・吹奏楽部なんて入ってたけど……。

「ね、入りましょう。お父様から聞いたんだけど沙羅さんって社会の成績凄く優秀なんですってね。貴方にピッタリよ。私達の部活は！！！！」

「花憐ちゃんって何部なの？」

社会の成績は、まあ〜良かったけどそれに関係ある部活って何？

「フフフっく秘密。沙羅さんが入ってくれば、分かることだわ。私達の部活は凄く楽しいわよ。」

花憐は不適な笑みを浮かべている。

どうしよう……。凄く楽しいなら入ろうかなあ。でも、花憐ちゃんの笑顔の裏に何かありそうだし。考えすぎかな……？

「うーん。入ろうかな。」

ほんの興味本位で言ってしまった。

「それじゃ早く部活に行きましょう。龍先輩に遅いって怒られてしまうわ。」

花憐ちゃんにてを取られて廊下を走り出した。

「で、何・・・部か、教え・・・てよ。」

走りながら言っているせいで途中途中、言葉が途切れてしまう。お嬢のくせに走るの早っ!!!

やっと花憐の足が止まった。人は、見かけによらないのね。呼吸を整えながら思った。

花憐ちゃんは、大きな扉のドアノブに手を掛けた。

「フフフツ……。沙羅さん、ようこそ社会研究部へ!!!」

——この瞬間、私の運命は唐突に狂いだした——

Secret 3

「龍先輩、新入部員を連れてきましたわ。」

と、花憐ちゃんはいかにも俺が部長ですみたいな、筋肉質で背の高い人に話しかけた。

部室のような（それでいて高級感漂う）部屋を見渡すと、四人ソファに座っている。

「おっ！めずらしな、新入部員なんて。君、名前は？」

うわー、社会研究部っぽくないなあ！野球部にいそう。・・・てゆうか、見た目とかなりギャップがあるな、この先輩！

「乙宮沙羅おとみやです。」

「沙羅！よくきてくれたっ。いやあ、部員が少なくてさ、ちょっと困ってたんだ。俺は龍。まあ、一応部長っていうことになってる。よろしくな！」

完全に入部することになっているらしい・・・。すると、龍先輩の隣に座っていた人が立ち上がった。

「こら、私達の紹介くらいしてくれたっていいじゃない。初めまして、沙羅さん。副部長の蒼葉あおばです。分からないことがあったら遠慮なく言ってね。」

うっわあ、これぞ大和撫子だ！と瞬時に思った。とにかく、超美人！！真っ直ぐで腰まで伸ばした黒髪。

すらっとした、モデルみたいな背。欠点が全く見当たらない。いや、欠点がない所が欠点なのかも・・・。

蒼葉先輩が立ち上がると、後の二人も立ち上がった。

「俺は、一年の金城京^{かねしろ きょう}。」

「私も同じく一年の東堂蘭です。」

「あの、皆さん。よろしくお願いします!」

と言って私は頭を下げた。

「まあ、座って座って。」

蒼葉先輩に促されて、ソファーに座る。ここで、私はさっきからずっと思っていた事を聞いてみた。

「あのー、社会研究部って何をするんですか?」

社会研究部と言う名前からして、正直オタクっぽいなあと考えたしまった。

でも今ここにいる人は、全員そんな感じがしない。さっき、花憐ちゃんやんが社会が優秀ならオツケーみたいな事を言ってたし・・・何なんだろう? 疑問を浮かべた顔をしていた私に、龍先輩が笑いながら答えた。

「きっと、最初オタクっぽいとか思っただろ。まあ、仕方がないんだけどな。確かにここは、社会が優秀な生徒が入る部活だ。表向きはな。」

「・・・え？表向きって・・・。」

さっき花憐ちゃんが不気味な笑いをしたのはこの事なんだろうか？

「おっと、これ以上は言えないぜ。まだ沙羅は仮入部だからな！これからテストを受けてもらう。筆記テストだ。満点取れたら晴れて正式入部だから気合い入れてがんばれよ！」

「えっ・・・いきなりですか!？」

何も説明されずにテスト用紙を渡される。そして言われるがまま、問題を解き始めた。

「終わった〜。」

「おつかれさん。見事満点だから、沙羅は今から晴れて正式入部だ！」

「おめでとう、沙羅さん。」

と、蘭ちゃんが言うてくれた。私は凄く嬉しくなった。

『ようこそ、Top Secretへ!!』

——え？《Top Secret》って・・・ナニ???

＊ ＊ ＊

「・・・。Top Secret?」

えっと・・・。つまり日本語に訳すと・・・トップは【最大】、シークレットは【秘密】だから・・・。

【最大の秘密】って事?

「大まかに言うそうだなあ。沙羅ってすぐ口に出るよな。」

龍先輩は、呆れた口調で言った。

私は、またしても口に出していたらしい。

「えーと、つまりどうゆうことですか?」

全く話の真相がつかめない。

「さっき、言ってた通りだけど・・・?」

「えっ?!」

もう少し何か詳しく教えてくれないかなあ!! 本当にこの人、部長なのっ!?

「こらっ! 龍。もう少し詳しく説明してあげないと沙羅さんが可哀想でしょ。」

蒼葉先輩は、眉間にシワをよせて龍先輩をどついた。

「・・・すまん。説明するのは苦手で・・・。」

龍先輩は、みるみる小さくなっていく。
美人を怒らせちゃいけないなあ・・・。

「全く。私が沙羅さんに説明します。えっと、何から聞きたいですか？」

「えっ・・・。」

聞きたいことは山積みだ。

「あの・・・。T o p S e c r e t って何ですか？」

【最大の秘密】 っていうたら何か凄そうな感じがする・・・。

「私達の部活は、表向きは地味な社会研究部だけれど裏は国家機密の組織です。通称、《T o p S e c r e t 》。」

「へえー。・・・って、ええー！！本当ですかっ!？」

「本当です。」

蒼葉先輩の顔付きは、真剣だ。辺りを見渡すと、みんな静かに頷いている。

国家機密って何!？

政治の事とか・・・!？

「あの・・・。国家機密って・・・?」

私の顔は、多分かなりひきつっていたと思う。
ヤバイ部活に入ってしまったのかも……。

「表ざたにされていない世界についての事よ。」

「表ざたにされていない……世界？」

「そう。一般的には異世界と言うと思います。」

「い、……異世界!？」

異世界……。昔お父さんに異世界について尋ねたことがあった。

『ねえねえ、お父さん。この絵本みたいに魔法があったり、魔物がいる世界って何ていうの?』

『異世界っていうんだよ。沙羅。』

『へえー、お父さん!私、異世界に行ってみたい。』

『……。そうだね。いつか行ける日が来るかもね。』

『うん!!』

それから私は、年を重ねるごとにこの世に異世界が存在しないことに気が付いた。

あの時、お父さんは何故、私の行ったことに対し否定しなかったん

だろう・・・まだ私が幼かったので子供の夢を壊したくなかったからか・・・それとも、お父さんは異世界があることを信じていたのか・・・。

「沙羅さん？」

「えっ、はい！」

蒼葉先輩の声で、現実に戻された。

「沙羅さん、心ここにあらずでしたよ。」

「すみません。」

そういえば、さっき蒼葉先輩は異世界に行って調べるって・・・。

「異世界に行く・・・ええっー、！！！」

ありえないでしょ！！！！何なんだ、この部活は！？

Secret 4

蒼葉先輩によると（部長である龍先輩は、少しだけ説明した後、意味不明だと部員からブーイングが来たから蒼葉先輩にバトンタッチした）、この組織は10年前からあるらしい。

科学が著しく発展した日本の裏社会は、公にはされていないものの、地球とは異なる世界に行く方法がないかと考えを巡らせていたのだ。そんなある日、一人の少女が行方不明になった。普通ならば、テレビで放送されてそこで終わる。しかしいくら搜索しても、目撃者もいなければ、通信記録もない。そして、とうとう搜索が打ち切られたのだ。

「ある一人の学者がね。異世界に行ったのではないか、と言い出したの。」

当然、皆は冗談だろうと信じなかった。しかし、その二年後、その少女は帰ってきた。二年前と変わらない姿で。

これは誰もが驚愕したらしい。普通ならば、時がとまったまま生きて帰る事のできる時間ではない。

「その時から、日本は極秘で調べ始めたのよ。そして数年後、向こうの世界に行ける方法を見つけて、今に至るっていうわけ。この事は、まだほとんどの人は知らないわ。白百合学園でも社会研究部に入っている生徒しか知らないもの。」

なるほど、分かりやすい！

一瞬、部長は龍先輩ではなくて蒼葉先輩がなれば良かったのに…と思ってしまった。

「まあ、俺達は異世界に行って色々な事を学ぶって事だよ!」

龍先輩、それは省略しすぎでは…。

でも、違う世界かぁ…行ってみたいなあ。

すると、龍先輩が何かを思い出したような顔になった。

「あ、そうだ。三日後に異世界調査隊を派遣するんだけどまだ誰が行くか決めてないんだ。じゃあ沙羅。お前行ってきたらどうだ?」

「ええっ! いいんですか!?!」

「それはいいかもね。やっぱり話を聞くだけじゃなくて実際にどんな感じなのか見てみないと!」

百聞は一見にしかずだしね、と蒼葉先輩がつぶやく。

「わ、私一人ですか?」

と言った途端、皆が笑いだした。

「そんなわけないじゃん! 沙羅ちゃん一人で行ったら絶対迷いますよ!」

と、蘭ちゃんが言う。

「やっぱりそうだね」

絶対、と言われたのが少し悲しかった。でも、私はまだたったの一日しかここにいないのに、楽しいと思える自分がいた。何より皆凄

く気さくで、分からない事は教えてくれる。それと共に、ああここは本当に社会研究部じゃないんだな、と実感した。だけどこの部活、このメンバーならずつといられる気がした。

「…で、行き方なんだけどな。」

龍先輩が話しを変え、部室の奥へ歩きだす。そこには本棚以外何もない。龍先輩がついてくるように促し、私も歩いていくと、本棚の中でもひととき目を引く分厚い本を抜き出した。すると、ゆっくりと棚が動き始めたのだ！だんだん部屋への入口だということが分かってくる。しばらくして動きが止まった。驚きをなんとか隠し、中に入っていく。

電気がつけられると、私はとうとう驚きを通り越し、驚愕してしまった。

「ここが裏の極秘任務をする、この学園最大の秘密事項、《Top Secret》研究室だ！」

まず最初に目についたのが、右側にある尋常ではない数のファイルが入った、図書館と言うには幾分狭いだろう本棚の数々。真ん中は会社にあるような事務用の机が四台と、その上にパソコンが一台ずつ。左側には、エレベーターが一つあり、数字の書かれたボタンがついている。奥にはスクリーンのようなものが壁に貼られていた。

「……」

言葉が出て来ない。

…ここ、本当に学校の部室だね？

秘密事項と言われただけあって、とにかくすごい。というより、そ

れ以上言葉が浮かんで来ないと言った方が正しい。あまりの整備の良さに、驚きと共に不安さえ覚える。

「このエレベーターで異世界に移るんだ。まあ、三日後実際に見ればわかるさ!」

「……。」

何も話さない私に、龍先輩が苦笑いし、頭をぼんぽんとたたいた。

「まあ最初は馴れないだろうけど、時間が解決するさ。俺も結構驚いたしな。」

と言い、表の部室に戻った。

「あ、戻って来た!」

蒼葉先輩が皆に声をかける。…あれ? 私と龍先輩がいない間に人数が増えてる。

「あの、皆さんも部員ですか…わあっ!!」

私がいい終わるか終わらない瞬間、誰かが飛びついてきた。つ、強い力で身動きできないよ!

「やあ、蒼葉サンから聞いたで、沙羅ちゃんゆうらしいな! うちは二年の茜。よろしくな♪」

「よ…よろしく、お願いします…」

苦しい。と思いながら言ったら、蒼葉先輩が気付いたらしく、茜先輩に離すように言った。

「そろそろ離してあげないと、沙羅ちゃん気を失っちゃうわよ。」

茜先輩ははっとした顔で、腕の力を緩めた。

「ごめんな、沙羅ちゃん、うち力の加減すんの下手やねん。それに沙羅ちゃんめっちゃかわいいんやもん！な、今からでもいいからうちの妹にならへん？」

と言った所で、また力が強まる。

「はい、ストップ。そのへんでやめとけ、茜。沙羅が倒れそうだぞ」

茜先輩の暴走(?)を止めた人も、初めて見る人だった。

「茜と同じで二年の山久やまひさ。よろしくな。」

「よ…よろし、く…」

ぱたっと茜先輩に寄り掛かるようにして倒れた。

「沙羅ちゃん！」

「沙羅!？」

私の意識はここまでだった。

＊ ＊ ＊

辺り一面闇の中に、私はいた。光も何もない中でひたすらに走っていた。

別に、化け物や怪物が襲ってきて逃げているのではない。

ここには、自分しかいないという孤独感に襲われて、早くこの場所から出たいという願いが私の足を動かしていた。

『…さ…ら』

「! ! !」

誰かに名前を呼ばれた気がして立ち止まった。

暗闇の中遠くの方に淡い光が光っている。

『沙羅。』

今度は、はつきりと呼ばれた。この声には聞き覚えがある…。

「…お母さん。」

お母さんの顔は、あやふやでよく覚えていないけど、声はしっかりと覚えている。

透き通っていて、私をいつも安心させてくれたこの声はまさしくお母さんだ。

『こっちに來てはだめよ。沙羅。』

遠くで光っていた光が、強くなった。

私は、光に向かって走りだした。

さっきまでは、早くこの場所から出たい感情が強かったけれど、今はお母さんに会いたい気持ちの方が勝っていた。

『あなたは、こちらには来てはだめ。こっちには、来てはいけないわ。』

また、光が強くなった。

目が開けられない。

「!!!!!!」

強い光は私を包みこんだ。

＊ ＊ ＊

「…沙羅。」

花憐ちゃんの声がして私は目を覚めました。

「かなり、うなされてたけど大丈夫？」

「…うん。」

よく覚えてないけど変な夢だったなあ…。

「えっと…ここは？」

ふかふかのベッドで寝ていたことに気がついた。
確か、さっきまでは部屋にいて意識が飛んで……。えーと、それから
：どうなったんだろう。

「ここは、女子寮です。」

蘭ちゃんがソファ―に座って本を読んでいた。

「この部屋は、沙羅の部屋よ。急に沙羅が倒れるんだもの。びっくりしたわよ。蒼葉先輩と茜先輩と一緒に沙羅を運んできたの。女子寮には、龍先輩たちは入れないからね。」

花憐ちゃんは、優雅に紅茶を飲んでいた。

ここ、私の部屋なのに二人してかなりくつろいでる。まあーいつか。花憐ちゃんは、私のことを呼び捨てで呼んでいた。

それって、親しくなったってことかなあ…。

部屋全体を見渡すと、キッチンや机、本棚、液晶テレビなどがあり、かなり充実して広い部屋だった。

「沙羅、蘭。私お腹空いたわ。」

声からして、花憐ちゃんは少し不機嫌だった。

「そうですね。ダイニングホールに行きましょうか。」

確かに、お腹空いたなあ。私が意識を失ってかなり時間がたっていたようだ。

ダイニングホールって、食堂ってことかなあ？

「じゃあー早く行きましょう。」

花憐ちゃんは、早々と部屋から出ていった。

「花憐さんは、お腹がすくと機嫌が悪くなるんですよ。見た目からだとかなりギャップがありますよね。」

蘭ちゃんは、にこやかに笑って言った。

蘭ちゃんって、おっとりした人だなあ…。男の子がほっとかなさそう…。

花憐ちゃんは、美人系で蘭ちゃんは可愛い系かな。

そういえば、蒼葉先輩は大和撫子系だったし、茜先輩は元気な人だったけど顔はかなり綺麗だったし…龍先輩は、爽やか体育会系…京ちゃんと山久先輩もかなりかつこよかったような気がした…。みんなかなりモテてそうじゃん!!!

凡人の、私がいていいのかっ!!!? 私、影薄くなりそう…。

そんなことを考えているうちにダイニングホールに着いていた。

テーブルがあちこちにあり、生徒たちが座って食事を楽しんでいた。一言で言うと、うーん、高級レストランみたい!!

「ダイニングホールは、男子生徒と一緒になんだね。」

適当に空いているテーブルの椅子に座り向かい側に座った蘭ちゃんに尋ねた。

「はい。ダイニングホールを中心に東は男子寮、西は女子寮に別れてるんです。」

「へえー。そうなんだあ。」

「ご注文は?」

ウェイトレスがどこからともなく現れた。

…自分で、注文して取りにいかないんだあ…ここが、お金持ち学校
ってことを忘れてたっ!!!

「じゃあーAセットを3つお願い。」

花憐ちゃんが、テキパキと注文を済ませると、

数分後、美味しそうな料理のフルコースで出てきた。慣れないフォークとナイフを使い、全部綺麗に食べた。

「美味しかったっ!! 2人とも食べ方が凄く上品だね!!!」

「そうですか？」

蘭ちゃんは、不思議そうに首を傾げた。お嬢様にとって、上品な食べ方が当たり前なんだろうなあ。

「そういえば、社会科研究部の部員って今日会った人全員なの？」

私は、花憐ちゃんに尋ねてみた。

「ううん、違うわ。まだ男子が1人いるの。」

「まだ、いたんだあ。会ってみたいな。」

せっかくだから、今日中に全員ね部員の人の顔と名前を知りたかった。

「あっちにいるわよ。沙羅。」

花憐ちゃんの指差した先には、女子生徒の大群が集まっていた。

「…あの中!?!?」

凄い女子の大群なんですけど!!

「ええ。そうよ。」

私たちの、声が聞こえたのか女子生徒の大群の中にいた1人の男の子が手を振って近づいてきた。

「蘭さん。花憐さん。」

蘭ちゃんと花憐ちゃんの名前を呼んで来た男の子の顔を私はまじまじと見てしまった。

わぁーっ王子様みたい!!

Secret 5

その人は、何ていうか、ホントに白馬に乗った王子様！と思えるくらい美形だった。

髪は短過ぎず長過ぎず、上等な金髪。

カラーコンタクトを入れているのか、少し目が青っぽい気がする。正直、テレビに出演している人気俳優よりもかっこいいと思ってしまった。その人が近くに来ると、身長もすらっと高いのがわかる。175センチあるかないかとみた。これは女の人どころか、男性にもモテるんじゃないかと思う。冗談めきで。だって、見ようとすれば女性にも見えないこともないし。まあ、身長は高いんだけどね。

「まあた女子生徒にデレデレして…」

と花憐が言った。どうやらこの人とは気軽に話ができる仲らしい。その人は苦笑いした。

「いや、得に何もしてないんだけど…」

「沙羅、これは一年の西条光輝さいじょうこうきよ。ホントにこの二人とは腐れ縁なの。」

その男子生徒が私の方に向き直った。

「これってなんだよ、これって……。初めまして、沙羅さん。花憐が紹介してくれたけど、改めて言うね。僕は西条光輝です。社会研究部に入ったんだって？」

うつわあゝ！超紳士っぽい！これはモテるはずだよ。

私は光輝くんに気後れしそうになった。だって、顔良し、スタイル良し、さらに言葉使い良しなんだもん。いわゆる、欠点無し！

「は、はい！これからなにとぞよろしくお願いいたしますっ！」

「そんな敬語なんて使わなくてもいいのよ？沙羅。」

花憐が腕を組んで、しかめっ面のような、苦笑いみたいな顔をする。

「それに、そのうち分かるわよ。ある程度仲良くなると、光輝が本当はどんなに腹黒いか…」

「おいおい、初対面の人の前でそんな事言わなくても」

「あら、認めてるならいいじゃない。っていうか、なんでさんづけなの？」

「いや、そういう問題じゃなくて…みんなの前で呼び捨てするなって言ったの、花憐だろ？…一応」

「あら、そうだったかしら？」

「そうだったかしらって…覚えてないのかよ」

「そんな昔の事なんて覚えているはずがないわ！」

二人は、私と蘭がいるのを忘れて言い合いを始めた。

「なんか…仲良いんだね」

そんな二人を見て、蘭はにっこり笑った。

「そうですね。私と花憐と光輝さんは、保育園の頃からの幼なじみですから!」

「へえ。もしかして、あの二人って付き合ってたりする?」

『付き合ってません!!』

私が言った直後に即答された。

(息もぴったりだ)

幼なじみかあ…。私も中学生の時は周りからこんな風に見えていたのかな。友達と話をして、笑って。時々いたずらして、先生に怒られた事もあったっけ。

ほんの数ヶ月前の事なのに、なぜか中学校生活が遠い昔のように感じた。

＊ ＊ ＊

私は、寮の自室でふかふかのソファーに深く腰掛け蘭ちゃんから貰った異世界についての資料に目を通していた。

遂に明日は異世界調査隊が派遣される日。

異世界に派遣されるのは私と花憐ちゃん、光輝くんが決まった。あれから、2日間龍先輩や蒼葉先輩から異世界についていろいろと叩

き込まれた。そもそも、異世界とはその時代の背景によって様々存在するらしい。魔法を使う世界もあれば魔物が世の中を治めている世界も在るのだと蒼葉先輩が言っていた。

この、資料に書いてあるけど【注意事項その壺・異世界に行くにあたり、自分の身は自分で守ろう！】。守ろうって何！？どうやって守るんだよ！体力には、そこそこ自信があるけど、もし魔物や怪物が襲って来た場合逃げるしか私が生き残る確率はなさそう。

でも、人間戦える時はどんな奴でも戦えるのかなあ？まあ、今回の異世界は安全な場所を期待しよう…。ソファーに寝ころがり龍先輩から教えてもらったことを思い出した。
そういえば、言語は共通だって言ってた。

そう、異世界との言語は通じるらしい。あのエレベーターの時空間の歪みが関係していて、あの中に入ると脳の細胞？神経？が変化して…えーと何だっけ？龍先輩の説明が難しく、上の空で聞いていたのであまり覚えていない。

おおまかに言うと、私達が普通に話している日本語は異世界ではあつちの言語になっていて、逆に異世界人の話している言葉は私達には日本語に聞こえるようだ。

壁に掛かっている時計を見るともう12時を過ぎている。

「ふわああー。明日は、早いから寝るかあ。」

部屋の電気を消してベッドに入り込んだ。

明日は、楽しみだなあ。異世界ってどんな所だろう。ここにきてからは、珍しくほんの数秒で夢の中に落ちた。

ジリジリージリジリー

うるさい目覚まし時計の音で目を覚ました。

「眠い…。！！？ヤバいつ！！！」

時計を見ると、約束の時間を10分まわっていた。

急いで身支度を済ませ、朝食を食べる時間もないのでそのまま部室へと走る。

ヤバいいゝ！！龍先輩に怒られるっ！！

左、右、左と長い廊下の角を曲がりやっと社会科学研究部に着いた。

「はぁゝ。やっと着いた。」

部室のドアを開け、そのまま頭を下げた。

「すみません。寝坊しました。」

「沙羅、やっと来たか。」

頭の上から、龍先輩の声がする。

「まあー、いい。初日だし許してやる。」

「えっ、ありがとうございます。」

お礼を言いながら頭を上げると、龍先輩の他に蒼葉先輩、蘭ちゃん、京くんそして花憐ちゃんが真っ赤なフリルの付いたゴージャスなドレスを着ている姿が目に入った。

「！！！！花憐ちゃん！何その格好！！！！？えーと、ここって、コスプレ部でしたっけ！？」

ビククリして声が裏返ってしまった。

「何言ってるの？沙羅。ここは社会研究部でしょ。」

花憐ちゃんは、真っ赤なドレスをひるがえし、片方の眉を吊り上げ私に近づいて言った。

「今回行く異世界は、中世のヨーロッパみたいな世界に行くの。あちらの世界に行った時、制服だったら怪しまれるでしょう。」

「でも、だからってドレスが派手なような…？」

控えめな声で花憐ちゃんに告げた。

「あちらの世界での私の設定は伯爵家の令嬢なのよ。華やかにしなくちゃダメじゃない。それに、今回の異世界の調査はお城で開かれる舞踏会に忍び込み王宮の実態を調査することなの。舞踏会で一人浮いてたら恥ずかしいでしょう。ほら、沙羅も早く着替えなさい。」

「うっ……うん……」

花憐ちゃんは、私に青いドレスを渡した。ドレスと言うより……ワンピースのような感じで丈が長くなく動きやすそうで、大きなリボンが背中について可愛い感じだけど…何か、花憐ちゃんと比べるとかなり地味なような気が…。

隣の空き部屋で着替えを済ませ、部室に戻って来るとさっきまでいなかった光輝くんが白いタキシードを着ていた。

あの顔に金髪だから本当の王子様みたい…。
龍先輩が、異世界に行く私達3人に資料を渡した。

「さっき花憐が言ってたが、あっちの世界に行ったときの一人一人の設定はその資料に書いてあるから見ておけ。」

資料に目を通すと…えーと花憐ちゃんは

【名前カレーヌ。伯爵家の令嬢。】

カレーヌって花憐ちゃんのこと……!!?!伯爵家の令嬢っていうのは、合ってるなあ。

光輝くんは

【名前はコーキ。侯爵家の長男。】

コーキってそのままじゃん……!!?!

えーと、私の設定は…

【名前サーラ。没落貴族の娘。】

……没落貴族の娘……!!

なんじゃこりゃあ……!!?!

「龍先輩……!!何で私だけ没落貴族なんですか……!!?!」

「んゝそれは：一人くらいこういうキャラがないとつまらないだろ！」

…はぁあ！？

何ですか、それ！まるつきり差別！人権侵害！！確かに見た目は光輝くんや花憐ちゃんより全然かっこよくもかわいくもないけどつ。何、没落貴族の娘って！私だけ！！

「それ、言い訳にしか聞こえないんですけど！…まあいいですよ、別に！」

「な、何か沙羅の周りに黒いオーラがあるんだけど。」

光輝くんやその他諸々の人が目を丸くして私を見ている。

「沙羅、落ち着いて。沙羅は初めてなんだから仕方がないわ。」

「怒るな沙羅！」

「別に怒ってなんかいません！！！」

（（これは絶対怒ってるよ！！））

それを見た蒼葉先輩がため息をついた。うう、蒼葉先輩に落胆されると何故かこっちも落ち込む。

「みんな、沙羅ちゃんばかり攻めちゃだめよ。」

私は蒼葉先輩に尊敬の眼差しを向ける。やっぱり、日本の女性はスバラシイ！さすが平成の大和撫子だっ！！

「でも、そもそもこの設定にしようって言ったの、確か茜よね？」

……。

白けた場に茜先輩の顔がひきつる。

「…いやあ、ごめんな沙羅ちゃん！許して？」

「：別に、良いですけど」

「ああ！これは怒ってる！！怒ってるよ、どうしましょう蒼葉サン！」

と茜が慌て始めた。

別に良いもん！もう慣れたし！

「ホントにごめんなあ、沙羅ちゃん！でも、全員が金持ち御子息じゃあつまらないもんなあ？」

確かに最初はムツときたけど、今にも泣きそうな茜先輩を見て、まあ仕方ないかな、と思った。ていうか、本気で怒っているわけではないのは、ここにいる全員が分かっているだろう。

「もう良いですよ、早く次進みましょう？全然気にしてませんし」

そう言った途端、茜先輩の顔が明るくなり、再び抱きつかれた。

「ホンマに！？おおきに沙羅ちゃん大好きやー！！」

く、苦しい：

けど普段通りになって良かった！ここで、ずっと見学していた龍先輩が話し始めた。

：どこまで聞いたっけ？

Secret 6

暗ーい暗ーい闇の中…

「きゃーー！！」

「うわああああ！！」

「何なのー！？」

三人の絶叫が延々とこだまするのであった…

＊ ＊ ＊

さかのぼること一時間前…

だいたいの説明を聞き、ついに花憐ちゃん、光輝くん、私は異世界に行くエレベーター(?)の前に立った。

見た目は普通のエレベーターにしか見えないため、これで本当に違う世界に行けるのかなんて疑問に思ってしまう。

「いよいよね」

「ああ」

「緊張するなあ…」

それぞれ思う事は多々あるみたいだけど、三人共通してひとつ言え

る事がある。それは、みんなわくわくしているということだ。現に、私も多少恐怖があるものの、どんな世界が待っているのか楽しみで仕方がない。

「沙羅さん、花憐さん、光輝さん。気をつけて下さいね。」

蘭ちゃんが心配してくれた。

「沙羅ちゃんにしばらく会えないの嫌や。今からうちも行っちゃダメなん!？」

と、茜先輩。

「ダメ。茜は俺が側にいてやらないと、何するかわかったもんじやないからな」

山久先輩がほっぺを膨らませている茜先輩に釘をさす。

…あれ? 今何気なくすごい事言ったような…

「またまたあゝ茜先輩にラブですね! 山久先輩は!」

…ええ!!

「二人は付き合ってるんですか!？」

前も誰かに同じような事を言った気がするけど…

「まさか! なわけないやろゝ沙羅ちゃん! うちは山久なんかより沙羅ちゃんの方が100倍好きやで?」

「俺も同感。誰がこいつを好きなんて言った？」

花憐ちゃんがいきなり驚いた顔になった。

「そういう意味じゃないんですかあ！？だっていつつも二人でいるじゃないですか！私はてっきり付き合っているのかと…！」

と花憐ちゃんが言う。

「…あゝ、それ間違い。っていうか、付き合えない。姉弟だし。」

『…ええゝゝゝ！！？』

これはみんなが目をまるくした。どうやら初耳だったみたい。

「ち、違うって！姉弟でも血が繋がってないんや！…もう、誰にも言わんて約束したやろ！？」

「とか言って茜もいま話したよな？誤解されるより良いだろ」

「それはそうかもしれんけど…」

「はい、ストップ！話しがかなりそれてるだろ。その話はあと。今は三人を送らないと！」

と言って止めたのは、龍先輩。

あ、たまには部長らしい所もあるんだ、とちよっぴり見直した。

「いいか、沙羅はこれが初めてなんだ。花憐と光輝がしっかりしないとだめなんだぞ。異世界に行くのはとても危険なんだから、気を

引き締めて行けよ！」

龍先輩は、私達に喝をいれた。
蒼葉先輩が紙を持ってきた。

「それじゃあ、詳しい任務の説明をするわ。時代はこっちの世界でいう中世、絶対的な身分がある世界よ。三人が行く国は領土も経済的にも豊かで平和な国。でも、最近その国の王宮で何か異変が起きているらしいの。そこで、三人は何が起きているのか、原因をつきとめて欲しいのよ。」

ああ、だから貴族なんだ。私は没頭貴族だけど…。
でも、頑張って調査しないと！

「連絡はなるべくこまめにしてね。」

『はい！！』

蒼葉先輩に促され、エレベーターの中に三人が入る。
扉が閉まり、ゆっくりと動き始めた。

「……」

沈黙が流れる。

すると、いきなりガガガ…という妙々な音がした。
それを聞いた花憐ちゃんは、顔を青ざめた。

「！！すっかり忘れてたわ！このエレベーター、スピード調節がでないのよ！！！」

――その瞬間。

それは、人生で一番最悪な乗り物だった。

＊ ＊ ＊

『沙羅！！起きなさい！！』

花憐ちゃんの怒鳴り声と同時に頬に鈍い痛みを感じて私は意識を取り戻した。

「全く沙羅ってすぐ意識なくなるわね。」

「だからって頬つねることないんじゃないか。赤くなってるし。大丈夫か？沙羅。」

光輝くんは、心配そうに私の顔を覗き込んでくる。
わぁー、眩しい！！

顔が近いよ。美少年のドアップは心臓に悪いーーー。

「全然大丈夫！」

私は、その場から急いで立ち上がる。

辺りを見渡すとあの恐怖のエレベーターの中ではなかった。ヨーロッパ風の家々が建ち並んでいる路地裏のような場所。
ここって、もしかして…。

「異世界！？凄い本当に来たんだぁ！！でもあのエレベーターから

「どうやって…?」

意識がとんでたから覚えていない。

「あのエレベーターは、あれに繋がってたみたい。」

光輝くんが、指さしたのは大きな酒樽だ。酒樽の中を覗くとあるはずの底がなく何処までも続きそうな暗闇が広がっている。

「スピードの加減も出来ないし場所の指定も出来ないからやんなっちゃうわ。せつかくのドレスがぐちゃぐちゃじゃない。」

ドレスに付いた埃をはらいながら、花憐ちゃんが言う。

「じゃあ、ここからはみんな1人で行動だからしっかりこの世界で何が起きてるか調べるわよ。」

えっ、1人で行動するの!?

「……沙羅、1人で大丈夫か?」

また、光輝くんが私の顔を覗き込んでくる。

光輝くんの顔が眩しすぎます——!!!!

「だだだだ、大丈夫!!」

今、顔真っ赤だよ。

恥ずかしい————

「光輝、沙羅から離れなさい。沙羅が困ってるでしょう。あんたの

腹黒スマイルで沙羅が毒牙にかかったらどうしてくれるの。」

ど、毒牙！！？光輝くんって実は毒蛇！？ま、まさかそんなわけないかあ。

「腹黒スマイルとは失礼だろ？花憐。」

光輝くんは、爽やかに微笑んでいる。

「沙羅。気を付けなさい。あの笑顔で何人の女性を泣かせてきたことか…。沙羅は、1人でも大丈夫よね？」

「もちろん、大丈夫！」

こんな美形の2人といたらいろんな意味で目立ちそうだもん…。

「それじゃあ、夜の12時にまたここに集合ね。調査報告しましょう。あの時計台を見れば時間わかるから。」

時計台の針は午後3時を指していた。

「わぁー！！凄いー！！」

花憐ちゃんと光輝くんと別れた後、路地裏から出てみると広い広場につながっていた。広場には、たくさんの人が溢れ、とても活気づいている。

お城が見えるー！！！白いー！！絵本とかで見たことがあるお城だ
あ。あの中に王子様とかいるのかなあ？

「あ、しっかりこの世界の事調べなきゃ。」

まずは、話しかけやすい人に聞いてみよう。

「あの……。」

近くにいたお婆さんに話しかけようとした途端、広場の中心から騒
ぎ声が聞こえた。

何だろう……。騒がしい声ができる方向に行くと3〜4人の男が1人
の少女に話し掛けて何処かに誘っているようだ。

あの女の子嫌がつてるじゃん。これは、俗に言うナンパ！！助けな
くちや！！

「ちょっと！お兄さん！！彼女嫌がつてるじゃないですか。」

少女の前に立ち男達から離れさせた。

「はア？あんたには関係ないだろ！！」

「痛い目見たくなきゃ、お嬢ちゃん帰んなっ！！」

男達は、指の骨を鳴らして威嚇してくる。

「痛い目あうのはどっちですかね。」

良い運動になるかなあ。うーん、5秒で片付くな。

「この小娘が！」

男達は私に一斉に殴りかかってきた。

ボロボロになって逃げていく男達の背を見ながら私は後ろにいた女の子に話し掛けた。

「大丈夫？ あいつらに何かされてない？」

女の子の顔をまじまじと見てしまった。金髪美少女！ 年は私よりも少し下かなあ。わあー、目が青い！ 服もかなり高そうな感じが…。何処かのご令嬢かな？

「あなたこそ、お怪我はしていませんか？ 1人で男の方達に立ち向かって…。」

声まで綺麗…。

「大丈夫だよ。私黒帯だから！」

柔道やってて良かったあ。

「お怪我がなくて良かったです。あ、助けてもらいありがとうございます。私、エディと申します。あのー、お名前教えて頂けませんか？」

「私は沙・・・じゃなくてサーラです。」

危ない、危ない。ここではサーラだった。

ゴーン ゴーン

時計台の針が6時をさし鐘が鳴り響いている。あと6時間・・・少し急いだ方がいいみたい。

「エディちゃん。私お城に行かなくちゃいけないから。」

「え、お城ですか？」

「う、うん。また、会えたら良いね。じゃあー、バイバイ！」

私はお城に向かって走りだす。後ろで、エディちゃんが何か呟いた気がしたが、走る事に集中していた私には聞こえなかった。

「お城に行くのなら、また会えますよ…。…サーラ。」

エディは、お城に向かって走りゆく少女を見つめていた。

「エディ様!!!」

振り返ると身なりの良い長身の老人がいた。

「また、そのような格好で剣の練習から抜け出して…。捜しました

よ。自分の身分をわきまえて下さい。」

老人は、困り果てた顔をしている。

「あー、セバスチャン来たの？…剣の練習は、ロデイの方が得意だもん。別に一日くらい出なくてもいいじゃん。それに…今日抜け出したおかげで面白い人に会ったんだ…。」

太陽は、ゆっくり沈みかけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8241e/>

Top Secret

2010年10月15日20時57分発行